1 さまざまな市民

2.「昼間市民」

「昭和三〇年代には、戸塚駅からこの工場へ通うのにのんびり歩いて来れました。しかし、昨今は、戸塚もベッドタウンになったせいでしょうか、戸塚駅から東京・横浜方面に朝、通勤する人たちがワッと押し寄せてくるので、われわれは細い道を身を小さくして工場へ出勤しています。」戸塚駅近くのある電気メーカーの部長の話である。

■低い昼夜間人口比

昼間市民、つまり昼間、市内で生活し、あるいは働いている人はどのくらいいるだろう。

横浜は夜間人口では、東京都区部に次ぎ全国第二位であるが、昼間人口は二五一万人で、全国第三位である。このうち働いたり学んだりしている人は一二〇万人（一五歳以上）。内訳は働いている人一〇三万人、学んでいる人一七万人である。通勤・通学のために市外から横浜市内に入ってくる人（流入人口）は、市外に出る人（流出人口）に比べると少なく、約二八万人にすぎない。昼間人口は、夜間人口一〇〇人当り九〇・六人と大都市で一番低い（図―1）。

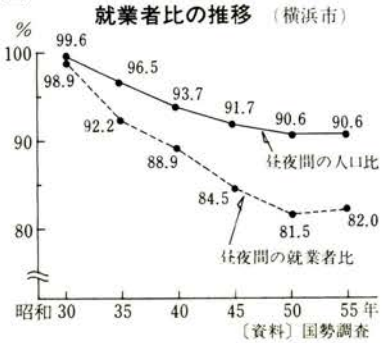
この昼夜間人口格差は、昭和三〇年代後半からの高度経済成長期に爆発的におこった人口急増現象によって拡大されてきたものである。しかし、五五年では五〇年とまったく同じ九〇・六になり、この傾向も一段落している（図―2）。これは、横浜の昼間人口が、東京・大阪の減少傾向とは対照的に一三万人もの増加をみていることのあらわれである。

■就業者、市外から2割

市内の昼間の就業者は一〇三万人である。この就業者の数は、夜間人口で全国第二位の大都市に見合った規模といえるであろうか。

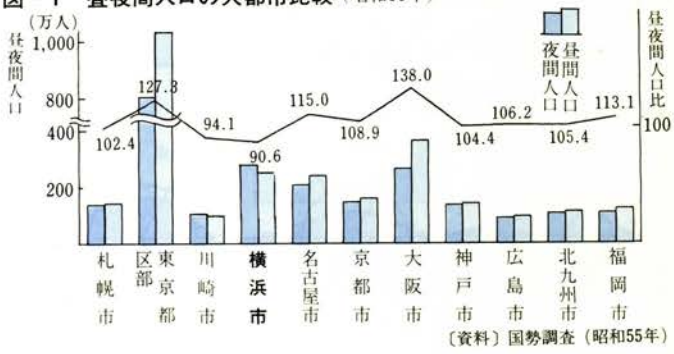
そこで、市内の昼間の就業者の

図―2　昼夜間の人口比・昼夜間の就業者比の推移（横浜市）



〔資料〕国勢調査

図―1　昼夜間人口の大都市比較（昭和55年）



〔資料〕国勢調査（昭和55年）

市民就業者に対する割合をみてみよう。五五年では八二・〇%である。この割合は他の大都市に比べかなり低く、昼間の活動がまだ十分行われていないことをうかがわせるものといえよう。しかし、この五五年の数字は五〇年に比べて〇・五%増加しており、三〇年以来下降の一途をたどってきた傾向に歯止めがかかった(図―2)。今後の動向が注目される。

つぎに、この昼間の就業者はどこから来ているかみてみよう。

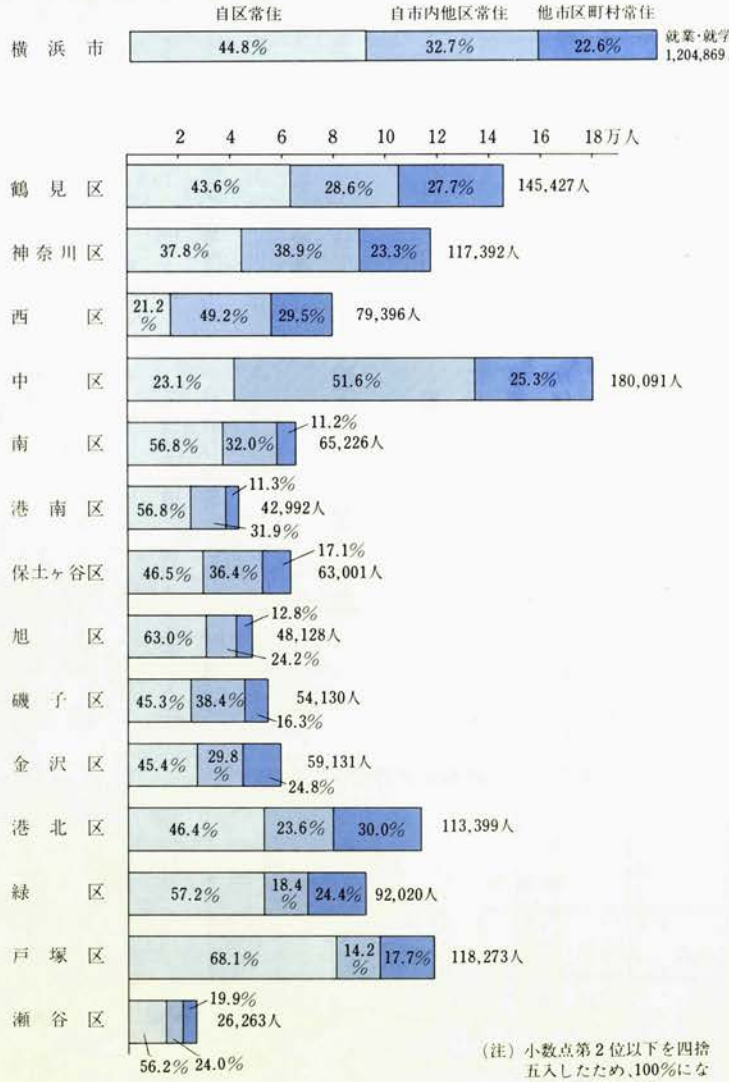
全体の七八%、八〇万人が横浜に住んでいる人たちである。残りの二二%、二三万人が市外から通ってきている。このうち多い順に都市をあげると、川崎、東京都区部、横須賀、藤沢となっている。

■45%は自区内から

市内で昼間、就業、就学している人のうち四五%は自分が住んでいる区内(自区内)からの人たちである。残りの三三%が市内の他区に住んでいる人、二二%が市外からの人となっている。

区別の状況をみてみると、中区の一八万人をトップに、鶴見、戸塚、神奈川区の順に就業者・就学者が多い。各区における事務所、工場、学校などの集積の度合により、夜間人口の場合とは異った分布を示している。また、どこから通っているかを各区ごとにみると、自分が住んでいる区からの割合が高いのは、戸塚・旭・緑区などである。他方、区外からの割合が際立って高いのは、都心部の西・中区である(図―3)。

図―3　昼間の就業者・就学者の分布(15歳以上)



(注) 小数点第2位以下を四捨五入したため、100%にならない場合もある。

〔資料〕国勢調査(昭和55年)